

〈研究・調査報告〉

新型コロナウイルス感染禍での地域高齢者の 社会的ネットワークにおける交流 —高齢者サロン参加者を対象に—

丸山あかね ・ 熊谷 玲子 ・ 井上 映子

【要旨】

目的：本研究は、地域高齢者の新型コロナウイルス感染禍（以下、コロナ禍）での社会的ネットワークにおける交流を明らかにし、有事の環境下での高齢者のフレイル予防のあり方を検討する。

方法：A市A地区で住民運営型地区活動（以下、高齢者サロン活動）に参加している自立生活者かつ介護認定を受けていない65歳以上の高齢者（以下、サロン参加高齢者）10名のコロナ禍での社会的ネットワークにおける交流に関するインタビュー内容のデジタル化データを分析対象とし、Berelsonの内容分析手法を用いて抽出した社会的ネットワークにおける交流477記録単位を分析した。

結果：社会的ネットワークにおける交流は、37のサブカテゴリに分類され、【普段どおりの近隣・友人との日常生活交流】、【活動仲間との再会を願う相互交流】、【家族との日常生活の営み】、【家族の感染を気遣う交流】、【外出制限下で創出された時間を活用した家族関係の深化交流】、【コロナ禍を機に見つめ直し心通わす家族の進化交流】、【コロナ禍ゆえに近隣・友人を気遣う相互交流】、【健康を維持する医療従事者との交流】、【日常生活のライフラインを支える職業人との交流】の9カテゴリに統合された。

結語：サロン参加高齢者は、平時から社会的つながりをもった暮らしを日常としているため、コロナ禍という有事下の環境においても、他者と良好な社会的つながりを維持・進展させて前向きに暮らそうとする交流をしており、有事の環境下でのフレイル予防には、高齢者自らが平時から社会的つながりをもって高齢者自らがエンパワメントを図れる支援が必要である。

キーワード：コロナ禍、社会的ネットワーク、社会的孤立、地域高齢者、エンパワメント

I. 緒 言

人生 100 年時代を見据え、平成 27 年度から介護予防事業では住み慣れた地域で自分らしく健康延伸を目指し、住民主体の通いの場を通じた高齢者の社会参加の促進が全国で取り組まれている。令和 2 年からは高齢者の保健事業と介護予防の一体的事業において、高齢者の通いの場への参加の拡大や、生活習慣病等の疾病予防・重症化予防とフレイル対策等の介護予防との一体的取り組みの強化を図っている（厚生労働省，2020）。

令和 2 年 4 月 7 日に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言（内閣官房，2020）が発出され、日本全国に不要不急の外出自粛が求められた翌日、厚生労働省は「集団形式等による高齢者保健事業を実施することは難しい状況にある。当面、通いの場の開催中止、地域の高齢者交流拠点等の閉鎖、ハイリスクアプローチにおいても訪問事業（対面指導）の中止」を都道府県に対し発出（社会保障実務研究所，2020）し、全国的に介護予防に取り組んできた高齢者の通いの場の活動が休止となった。

緊急事態宣言解除後、感染対策を図りつつ、地域の通いの場等の再起動・つなぎなおしを求めた（厚生労働省，2020）が、重症化しやすいとされる高齢者の集団での活動について、慎重な対応が図られている。

高齢者における「前フレイル期」においては、生活の広がり（「人とのつながり」）が精神・心身の状態に影響するため、フレイルの最初の入り口である「人とのつながり」を維持させる取り組みが必要であることを指摘している（独立行政法人国立長寿医療研究センター，2014）。また、社会参加の要因となる高齢者の交流には、情緒的交流や人間の欲求を満たす交流がある（松本ら，2020）ことから、介護予防の観点から長期化するコロナ禍においても、感染予防を図りつつも情緒的交流や高齢者の欲求を満たす人のつながりの交流を維持させてフレイルを予防することが重要となる。

このようにコロナ禍による日常生活における身体活動、文化活動、地区活動の制限は、人とのつながりを希薄にさせ、高齢者のフレイルのリスクを高め、主観的 QOL の低下にも繋がることが考えられる。

特に積極的に高齢者サロン活動で社会的交流を図ってきた高齢者は、通い場の活動の自粛によって日常における身体活動、文化活動、地区活動が減少し、社会参加による社会的役割の縮小から社会的孤立を招き、フレイルをはじめとする二次的健康被害を大きく受けることが推察される。

しかし、コロナ禍において、社会的つながりの縮小がサロン参加高齢者の生活行動や個人の社会的ネットワークおよび社会的つながりや、高齢者の価値志向がどのような状態にあるのかは明らかにされていない。

以上のことから、コロナ禍という有事の環境下においての社会的つながりを維持するフレイル予防のあり方を検討するために、コロナ禍で自粛生活を強いられたために日常の活動が

大きく変化したであろうサロン参加高齢者を対象に、社会的ネットワークにおける交流の実態を明らかにする必要がある。

【用語の定義】

社会的ネットワークにおける交流：社会的ネットワークとは、人間関係の構造的側面（原田，2017）をさし、人間社会は構成する個々の人々の解釈によって形成されるものであり、他者との相互作用の中でお互いに調整されているという流動的で過程的なものである（長谷川，2011）。また、交流とは、広辞苑によると、ちがった系統のものが互いに入りまじること、入りまじらせることである。これらから、本研究の社会的ネットワークにおける交流とは、個人を中心として形成される他者との意味ある社会的行為（相互作用）の行動と表出された感情とする。

Ⅱ. 目的

本研究の目的は、積極的に地域活動をしているサロン参加高齢者を対象に、コロナ禍での社会的ネットワークにおける交流（社会的行為の行動と表出された感情）を明らかにし、有事の環境下での高齢者のフレイル予防のあり方を検討することである。

Ⅲ. 方法

1. 対象

対象は、A市A地区でA高齢者サロン活動にコロナ禍以前より参加している自立生活者かつ介護認定を受けていない65歳以上の高齢者17名である。

2. 調査方法

1) 対象のリクルート方法

事前にA市A地区のA高齢者サロン活動をおこなっている長寿会会長（以下、会長）に研究概要を電話で説明し、研究協力の同意を口頭にて承諾を得て研究説明書を送付した。後日送付した研究説明書に基づき研究概要を説明し調査承諾を得た。

A市A地区のA高齢者サロン活動の参加者17名に配付する研究説明書一式は会長に送付し、会長は高齢者サロン開催時に配付した。研究協力者は、連絡先の電話番号、研究協力日時を記名し、署名した研究同意書とともに研究者に返送した。研究者は希望する日時に電話で調査研究の趣旨を説明し、口頭にて承諾を得た。

2) 調査方法

研究協力に承諾を得た 10 名に対し、各対象者の希望日時に電話によりインタビューガイドを用いて半構造的に 1 人 30 分前後のインタビューを 1 回行い、データを収集した。インタビュー内容は対象者に許可を得て IC レコーダに録音し、逐語録におこしたデジタル化データを分析対象とした。

3. データ収集期間

2020 年 10 月

4. 調査内容

調査内容は、対象の基本属性（年齢、性別、世帯構成、居住年数、要介護認定状況、治療中の疾患の有無及び通院頻度、交流の頻度と手段）と、インタビューガイドの①コロナ禍ではどのような生活を送っていたか、②コロナ禍ではどのような心身の状態であったのか、③コロナ禍ではどのような人（他者）とどのような交流をしたか、である。

5. 分析方法

データ分析には、対象者の「現にある状態」を表すことができる Berelson (1957) の内容分析法を用いた。分析対象は、対象者から表明された言語的コミュニケーションの内容を逐語録にしたデジタル化データである。デジタル化データから、「コロナ禍におけるサロン参加高齢者の社会的ネットワークにおける交流」に関する内容を抽出し、意味の内容が伝わる最小単位の文脈に分け、主語と述語からなる一単文を一つの記録単位とした。また、一単文に複数の内容が含まれている場合は分割し、複数の記録単位に整理した。そのうち他者との社会的行為の行動及び感情内容が不十分な文章は除外した。

次に記録単位の意味内容の類似性に沿って記録単位を意味内容の類似性に沿って集約し、分類が表す内容をサブカテゴリとして命名した。さらにサブカテゴリの意味内容の類似性に従って統合し、分類が示す内容をカテゴリとして命名した。

6. カテゴリ分類の信頼性を確保するための手続き

研究者 2 名は、記録単位からサブカテゴリに集約し、さらに統合しカテゴリを命名した。この分析過程において、コロナ禍におけるサロン参加高齢者の社会的ネットワークの交流として常にデータの妥当性、整合性を研究者間で繰り返し確認し、合意するまで再分析する作業を行った。また、カテゴリの信頼性は、最初のカテゴリ分類に関与していない他の研究者 1 名が独立で、全記録単位 477 から無作為に 20%の記録単位 (96 記録単位) を抽出し、その記録単位をカテゴリにあてはめ Scott の式に基づき一致率を算出した。一致率の判定に基準は示されていないが、70%以上の一致率で信頼性を確保した (舟島, 2016)。

7. 倫理的配慮

新型コロナウイルスによる感染により重症化しやすい高齢者との接触をさけるため、電話を用いて実施した。研究協力者へ文書と口頭により調査の趣旨、個人情報保護、データの取り扱い、研究参加の辞退の自由、研究協力の途中撤回、拒否に対しての不利益が生じないことへの保障、インタビュー内容の録音の同意について説明し、調査協力の了解を得た。なお、本研究は城西国際大学倫理審査委員の承認を得て実施した（承認番号：15W200011）。

IV. 結果

1. 基本属性（表1）

対象は男性1名、女性9名の計10名で、平均年齢は79.2±5.08歳であり、全員が基礎疾患をもち、治療を継続していた。

家族形態は独居世帯2名、夫婦のみ世帯5名、子ども等同居世帯3名であり、居住年数は20年以上50年未満が6名、50年以上が4名であった。

表1 対象者の属性

対象者	男性1名、女性9名 計10名
年齢	70歳代4名、80歳代：6名 平均年齢：79.2±5.08歳
家族構成	独居：2名 夫婦のみ：5名 子供等の同居：3名
居住年数	20年未満：0人 20年以上50年未満：6人 50年以上：4人
疾病治療	定期受診治療あり：10名

2. 別居家族と家族以外の者との交流頻度と手段（表2）

別居家族との交流は、月2~3回以上対面交流が8名であり、月1回以上の電話での交流が9名であった。LINE/メールでの交流は2名であった。週に1回以上、対面または電話で交流していた高齢者は8名であった。

家族以外の者との交流は、毎日対面交流が2名、「畑」での交流が4名、週1回以上電話での交流が2名であった。

表2 別居家族および家族以外の者との交流頻度と手段 (n=10)

	別居家族との交流					家族以外の者との交流				
	電話	来訪	訪問	LINE/ メール	他	電話	来訪	訪問	LINE/ メール	畑
毎日		2					1	1		4
週4日以上	2	0								
週1回以上	3	1		2		2				
月2-3回以上	3	4	1						2	
月1回以上	1									
半年1回以上			1							

(複数回答あり)

3. コロナ禍でのサロン参加高齢者の社会的ネットワークにおける交流 (表3)

コロナ禍でのサロン参加高齢者の社会的ネットワークにおける交流を示す内容は、全 479 記録単位であった。「家族が買い物に行った」等の他者との意味ある社会的行為の行動や感情が不明確である 2 記録単位は除外し、477 記録単位を分析データとした。この分析データを相互の類似性と相違性に従い統合した結果、37 サブカテゴリが生成され、さらに意味内容の類似性により統合し、【普段どおりの近隣・友人との日常生活交流】、【活動仲間との再会を願う相互交流】、【家族との日常生活の営み】、【家族の感染を気遣う交流】、【外出制限下で創出された時間を活用した家族関係の深化交流】、【コロナ禍を機に見つめ直し心通わす家族の進化交流】、【コロナ禍ゆえに近隣・友人を気遣う相互交流】、【健康を維持する医療従事者との交流】、【日常生活のライフラインを支える職業人との交流】の 9 カテゴリが生成された。カテゴリと記録単位とのカテゴリ分類の一致率は 79.6%であった。

以下、サブカテゴリを< >で、記録単位を「 」で示し、カテゴリごとにコロナ禍でのサロン参加高齢者の社会的ネットワークにおける交流を示す。

表3 コロナ禍でのサロン参加高齢者の社会的ネットワークにおける交流

【カテゴリ】	記録 単位数 (%)	<サブカテゴリ>	【記録単位例】
普段どおりの近隣・友人との日常生活交流	103 (21.6%)	日常生活の営みで交わす近隣・友人との相互交流 変わることない親密な友人と頻繁に交流 長年の生活から織成す親密な近隣・友人との相互関係に安堵 普段どおりに近隣・友人と相互の生活サポート 生活の営みで近隣・友人から受ける生活サポートに感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・ご近所さんとは自粛生活とは変わらず挨拶や立ち話はしていた ・毎日の畑仕事で隣の畑にいる友人と、楽しく話ができるから、大きく変わったことはない ・遠方の級友とは、頻繁に電話で話すのは変わらない ・ご近所とは昔から一緒にたから安心できる ・骨折の通院時も病院に連れて行ってもらった ・近所の方とはお野菜のつながりがある ・近所の方々みんなに支えられて生きている ・近所の方が自身の生活ぶりをよく知っている ・趣味の会の再開はこの先あるのかわからない ・自分が参加していたクラブ活動が、また中止になってしまった
活動仲間との再会を願う相互交流	89 (18.7%)	近隣・友人による自身への認知に安心 先行きが見えない趣味・サロン活動再開が気がかり	<ul style="list-style-type: none"> ・ウオーキング再開で仲間との再会を喜び合い、再会を約束した ・活動再開で気持ちの張り合いが出て、身だしなみも考えた行動に変化した
家族との日常生活の営み	66 (13.8%)	趣味・サロン活動再開への願い 生活の営み中での家族との交流 家族による日常生活サポート	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナが収束すればいろいろな活動が始まり、参加できる ・家族と同居しており朝起きれば食事もお風呂も一緒にある ・娘が毎日来てくれる ・長女とは何か用事あれば来てくれ、自分も行く ・娘が嫁ぎ先で作った作物を持ってきてくれる ・1人で病院に行けないため、娘と一緒に行く
		家族との互助関係に安心	<ul style="list-style-type: none"> ・孫に欲しいものを伝えようと購入してきてくれ、困らない ・息子が力になってくれる
		家族の促しに応じる日常の健康行動	<ul style="list-style-type: none"> ・娘に体を動かすように言われているため、寝て行う運動を続けている

家族の感染を気遣う交流	52 (10.9%)	感染を気づかう家族の思いを受容	<ul style="list-style-type: none"> ・床屋に出かけたが家族に反対され出かけられないのが困った ・同居の孫娘は公共機関利用するため、密になるのが嫌と一人で食事とっている ・娘が出かけることに口うるさく電話をかけてきてくれるのはありがたい
外出制限下で創出された時間を活用した家族関係の深化交流	50 (10.5%)	家族の感染を回避させる行動 家族への感染が気がかり 外出制限下の時間で夫の健康問題に直視して先行きに不安 外出制限下で夫の健康問題と対峙	<ul style="list-style-type: none"> ・主人に公共機関利用を伴う都内の病院への定期受診をやめさせた ・遠距離の姉妹とはお互い接触しないようにお互い気をつかい、会わない ・主人に自粛前伝えることはなかったマスクと手洗いをするように伝えている ・息子は都内に満員電車で揺られ通勤しているから感染が心配 ・自分が感染することで孫達に感染させてしまう ・自粛生活で認知症の主人の今後の行き先への不安が募る ・具合の悪い主人を残して出かけることに気兼ねなく、主人の療養の世話ができた ・主人の日ごとに変化する神経の痛みの愚痴を聞くが大変であった ・コロナ禍を機に夫婦共元氣なうちにお墓について考え、視察に行く ・コロナ禍で認知症の主人に出来ることに挑戦する思いがある ・自粛生活で認知症の主人の介護の大変さを感じたことで自身が一歩成長した ・主人にこれこれ言われると疲れてしまう ・自粛生活の中で認知症主人の介護を自身でやる覚悟ができた ・自粛生活で認知症の主人の介護をし、自身の行動の切り替えができるようになった ・都内に住む息子と頻繁に連絡を取るようになった ・コロナ禍を機に息子の勧めでスマホに変える ・コロナ禍を機に遠方に住む息子がLINEで孫の成長を見せてくれる ・孫の写真を飾っているので会えなくても寂しくもない ・自分は家族と一緒に生活できて幸せと思う ・遠方の孫達にお正月、会えるかわからないが会いたい
外出制限下で創出された時間を活用した家族関係の深化交流	49 (10.3%)	夫の健康問題の葛藤から自己成長を実感 外出制限下で夫婦の些細なやり取りへの過敏疲労 外出制限下での夫の健康問題・行動に対する自身の覚悟 家族とコロナ禍を機に新たな相互連絡の試み 気づかされた家族との相互関係に安堵 遠方の家族との対面再開への募る思い	<ul style="list-style-type: none"> ・自粛生活で認知症の主人の介護の大変さを感じたことで自身が一歩成長した ・主人にこれこれ言われると疲れてしまう ・自粛生活の中で認知症主人の介護を自身でやる覚悟ができた ・自粛生活で認知症の主人の介護をし、自身の行動の切り替えができるようになった ・都内に住む息子と頻繁に連絡を取るようになった ・コロナ禍を機に息子の勧めでスマホに変える ・コロナ禍を機に遠方に住む息子がLINEで孫の成長を見せてくれる ・孫の写真を飾っているので会えなくても寂しくもない ・自分は家族と一緒に生活できて幸せと思う ・遠方の孫達にお正月、会えるかわからないが会いたい

	気づかされた家族の安寧への願い 対面できない別居家族への心遣い		<ul style="list-style-type: none"> ・同居していない子供たちに迷惑をかけたくない ・会う回数が減ったのもあり、月に1度遠方の娘に品物と一緒に絵手紙を添えて送る ・娘たちが来てくれるのが楽しみである ・近隣に住む独居の方の愚痴を聞いてあげる ・同級生に会えないが自身がつくったものを送っている ・畑で若い人達とたわいもない話をするのも貴重と感じる ・主人の仕事の関係で全国各地の友人とつながっている ・仲の良い近隣者と会えないことが寂しく気がかりである ・この地区に感染者がまだ発生していないが、感染者が出たら考えてしまう ・定期受診には受診している ・初診後、主人に訪問診療で医師が来てくれるようになり助かった ・普段受診時タクシーがないと通院できないので助かる ・認知症の主人が迷子時、普段利用のタクシー運転手に助けてもらった ・気になっていた美容院がやっているか郵便屋さんに状況を尋ねた
	家族との対面再開に高揚 コロナ禍で近隣・友人を気遣う連絡行動	48 (10.1%)	<ul style="list-style-type: none"> ・近隣・友人との些細な会話や手紙をも得難い交流 ・コロナ禍ゆえに友人とのつながりを想起した安堵感 ・親密な友人に会えないことへの寂しさ ・近隣・友人への感染が気がかり
	健康を維持する医療従事者との交流	16 (3.4%)	<ul style="list-style-type: none"> ・医療機関に定期受診 ・生活に寄り添う医療介入の存在に感謝
	日常生活のライフラインを支える職業人との交流	4 (1%)	<ul style="list-style-type: none"> ・普段利用するタクシー運転手による家族サポートに感謝 ・郵便配達員を通じた地域情報入手
		477 (100%)	

【普段どおりの近隣・友人との日常生活交流】

このカテゴリは、コロナ禍においてもサロン参加高齢者は普段どおりに親密な友人と相互に気遣い、相互に助け合う近隣・友人との関係の中に自らが存在していることを実感し、安堵する交流であり、＜日常生活の営みで交わす近隣・友人との相互交流＞、＜変わることはない親密な友人と頻繁に交流＞、＜長年の生活から織成す親密な近隣・友人との相互関係に安堵＞、＜普段どおりに近隣・友人と相互の生活サポート＞、＜生活の営みで近隣・友人から受ける生活サポートに感謝＞、＜近隣・友人による自身への認知に安心＞の6つのサブカテゴリが含まれ、103の記録単位を含み、全記録単位総数の21.6%に該当した。

サロン参加高齢者は、「ご近所さんとは自粛生活とは変わらず挨拶や立ち話はしていた」とコロナ禍においても＜日常生活の営みで交わす近隣・友人との相互交流＞を継続していた。「毎日の畑仕事で隣の畑にいる友人と、楽しく話ができるから、大きく変わったことはない」、「遠方の級友とは、頻繁に電話で話すのは変わらない」と、コロナ禍前から＜変わることはない親密な友人と頻繁に交流＞していた。「ご近所とは昔から一緒だったから安心できる」と＜長年の生活から織成す親密な近隣・友人との相互関係に安堵＞もしていた。

また、サロン参加高齢者は「骨折の通院時も病院に連れて行ってもらった」、「近所の方とはお野菜のつながりがある」と、コロナ禍においても＜普段どおりに近隣・友人と相互の生活サポート＞を行い、「近所の方々みんなに支えられて生きている」と相互に支え合う＜生活の営みで近隣・友人から受ける生活サポートに感謝＞し、「近所の方が自身の生活ぶりをよく知っている」と近隣者と長年共に暮らし、＜近隣・友人による自身への認知に安心＞もしていた。

【活動仲間との再会を願う相互交流】

このカテゴリは、趣味活動やサロン活動が中止になる中で活動仲間を気遣い、活動ができない寂しさや活動再開を願望する感情交流であり、＜先行きが見えない趣味・サロン活動再開が気になり＞、＜趣味・サロン活動の再開に高揚＞、＜趣味・サロン活動再開への願い＞の3つのサブカテゴリが含まれ、89の記録単位を含み、全記録単位総数の18.7%に該当した。

サロン参加高齢者は、「趣味の会の再開はこの先あるのかわからない」、「自分が参加していたクラブ活動が、また中止になってしまった」と＜先行きが見えない趣味・サロン活動再開が気になり＞になっていた。自粛生活が徐々に解除になる中、「ウォーキング再開で仲間との再会を喜び合い、再会を約束した」と再会に歓喜し、「活動再開で気持ちの張り合いが出て、身だしなみも考えた行動に変化した」と生活に張り合いを感じ、身だしなみを気にかける行動をするなど＜趣味・サロン活動の再開に高揚＞し、「コロナが収束すればいろいろな活動が始まり、参加できる」と活動仲間と個々の目的目標を遂行するために＜趣味・サロン活動再開への願い＞をもっていた。

【家族との日常生活の営み】

このカテゴリは、コロナ禍においても普段どおりに家族との日常生活を営む交流であり、＜生活の営み中での家族との交流＞、＜家族による日常生活サポート＞、＜家族との互助関係に安心＞、＜家族の促しに応じる日常の健康行動＞の4つのサブカテゴリが含まれ、66の記録単位を含み、全記録単位総数の13.8%に該当した。

サロン参加高齢者は、「家族と同居しており朝起きれば食事もお風呂も一緒である」、「娘が毎日来てくれる」とコロナ禍でも普段どおりの日常生活を送り、「長女とは何か用事あれば来てくれ、自分も行く」とコロナ禍以前からの家族関係を維持する日常の＜生活の営み中での家族との交流＞をしていた。

また、サロン参加高齢者には「娘が嫁ぎ先で作った作物を持ってきてくれる」、「1人で病院に行けないため、娘と一緒にいく」とサロン参加高齢者の生活を維持するための＜家族による日常生活サポート＞があり、コロナ禍においてもこれまでの生活を維持できるように家族はサロン参加高齢者を支えていた。サロン参加高齢者は「孫に欲しいものを伝えると購入してきてくれ、困らない」、「息子が力になってくれる」という＜家族との相互関係に安心＞し、普段どおりの生活を営み続け、「娘に体を動かすように言われているため、寝て行う運動を続けている」という＜家族の促しに応じる日常の健康行動＞を通じた交流をしていた。

【家族の感染を気遣う交流】

このカテゴリは、コロナ禍という社会環境がサロン参加高齢者と家族に感染を常時気にさせ、サロン参加高齢者は家族に感染を回避させる行動を促し、感染を気遣う家族の思いを受容する感情の交流であり、＜感染を気づかう家族の思いの受容＞、＜家族の感染を回避させる行動＞、＜家族への感染が気がかり＞の3つのサブカテゴリが含まれ、52の記録単位を含み、全記録単位総数の10.9%に該当した。

サロン参加高齢者は、「床屋に出かけたいが家族に反対され出かけられないのが困った」と家族の感染を懸念する思いを受け止め、理髪店への外出を控えていた。また、「同居の孫娘は公共機関利用するため、密になるのが嫌と1人で食事をとっている」、「娘が出かけることに口うるさく電話をかけてきてくれるのはありがたい」と家族の行為に感謝して＜感染を気づかう家族の思いを受容＞した。

また、サロン参加高齢者は「主人に公共機関利用を伴う都内の病院への定期受診をやめさせた」と夫の感染を気につけ、定期的に受診してきた遠方の病院受診を控えさせ、「遠距離の姉妹とはお互い接触しないようにお互い気をつかい、会わない」と遠方の姉妹との往来を控え、「主人に自粛前伝えることはなかったマスクと手洗いをするように伝えている」と同居する家族に感染の予防を図る＜家族の感染を回避させる行動＞をしていた。そして「息子は都内に満員電車で揺られ通勤しているから感染が心配」、「自分が感染することで孫達に感染させてしまう」と同居家族と自身が相互に感染を受けるとして＜家族への感染が気がかり＞に

なっていた。

【外出制限下で創出された時間を活用した家族関係の深化交流】

このカテゴリは、コロナ禍のために外出自粛が求められた環境下で、サロン参加高齢者が同居する夫の健康問題や自身の問題と向き合い、抱える課題を解決しようと志向し、家族関係を深化、発展させる交流であり、＜外出制限下の時間で夫の健康問題に直視して先行きに不安＞、＜外出制限下で夫の健康問題と対峙＞、＜コロナ禍で今後の夫婦生活を志向＞、＜夫の健康問題の葛藤から自己成長を実感＞、＜外出制限下で夫婦の些細なやり取りへの過敏疲労＞、＜外出制限下での夫の健康問題・行動による自身の覚悟＞の6つのサブカテゴリが含まれ、50の記録単位を含み、全記録単位総数の10.5%に該当した。

サロン参加高齢者は、「自粛生活で認知症の主人の今後の行き先への不安が募る」という＜外出制限下の時間で夫の健康問題に直視して先行きに不安＞を抱いていた。「具合の悪い主人を残して出かけることに気兼ねなく、主人の療養の世話ができた」と夫の健康問題と向き合い、療養の世話をする一方で、「主人の日ごとに変化する神経の痛みの愚痴を聞くが大変であった」と夫の身体的苦痛の訴えを受け止る大変さを感じつつ、＜外出制限下で夫の健康問題と対峙＞していた。

また、サロン参加高齢者は、「コロナ禍を機に夫婦共元気なうちにお墓について考え、視察に行く」とコロナ禍を機に夫婦のこれからの人生を考えて行動し、「コロナ禍で認知症の主人に出来ることに挑戦する思いがある」とコロナ禍においても認知症の夫にできることに挑戦する試み、＜コロナ禍で今後の夫婦生活を志向＞していた。「自粛生活で認知症の主人の介護の大変さを感じたことで自身が一步成長した」と＜夫の健康問題の葛藤から自己成長を実感＞することもできていた。一方で、「主人にあれこれ言われると疲れてしまう」と＜外出制限下で夫婦の些細なやり取りへの過敏疲労＞も見られていた。

そして、「自粛生活の中で認知症の主人の介護を自身でやる覚悟ができた」と認知症の夫の介護を通し、＜外出制限下での夫の健康問題・行動に対する自身の覚悟＞もしていた。

【コロナ禍を機に見つめ直し心通わす家族の進化交流】

このカテゴリは、コロナ禍の環境下で、サロン参加高齢者は子供や孫・親族を含む同居・別居家族との交流も自粛する状況ゆえに家族関係を見つめ直して心通わし、家族が進化して新たな形を作る交流であり、＜家族とコロナ禍を機に新たな相互連絡の試み＞、＜気づかされた家族との相互関係への安堵＞、＜遠方の家族との対面再開への募る思い＞、＜気づかされた家族の安寧への願い＞、＜対面できない別居家族への心遣い＞、＜家族との対面再開に高揚＞の6つのサブカテゴリが含まれ、49の記録単位を含み、全記録単位総数の10.3%に該当した。

サロン参加高齢者は、自粛生活で遠方に住む子ども達と対面できない中、「都内に住む息子

と頻繁に連絡を取るようになった」と連絡を取り合う回数が増え、「コロナ禍を機に息子の勧めでスマホに変える」、「コロナ禍を機に遠方に住む息子が LINE で孫の成長を見せてくれる」と会えない中でも、新たな方法で互いに心を通わせ、＜家族とコロナ禍を機に新たな相互連絡の試み＞をした。「孫の写真を飾っているので会えなくても寂しくない」、「自分は家族と一緒に生活できて幸せと思う」と家族との関係を振り返り、あらためて良好な相互の関係に気づき、＜気づかされた家族との相互関係に安堵＞し、「遠方の孫達にお正月、会えるかわからないが会いたい」と＜遠方の家族との対面再開への募る思い＞を抱いていた。

また、サロン参加高齢者は「同居していない子供たちに迷惑をかけたくない」とコロナ禍で別居している子供たちを思い、＜気づかされた家族の安寧への願い＞があり、「会う回数が減ったのもあり、月に1度、遠方の娘に品物と一緒に絵手紙を添えて送る」と＜対面できない別居家族への心遣い＞があった。そして、「娘たちが来てくれるのが楽しみである」と再会を楽しみにして＜家族との対面再開に高揚＞していた。

【コロナ禍ゆえに近隣・友人を気遣う相互交流】

このカテゴリは、コロナ禍の環境ゆえに紡ぎだされた近隣者・友人との行動および感情であり、＜コロナ禍で近隣・友人を気遣う連絡行動＞、＜近隣・友人との些細な会話や手紙をも得難い交流＞、＜コロナ禍ゆえに友人とのつながりを想起した安堵感＞、＜親密な友人に会えないことへの寂しさ＞、＜近隣・友人への感染が気がかり＞の5つのサブカテゴリが含まれ、48の記録単位を含み、全記録単位総数の10.1%に該当した。

サロン参加高齢者は、「近隣に住む独居の方の愚痴を聞いてあげる」と近隣の独居高齢者を気遣い、「同級生に会えないが自身がつくったものを送っている」と対面できない＜コロナ禍で近隣・友人を気遣う連絡行動＞をとっていた。また、サロン参加高齢者は「畑で若い人達とたわいもない話をするのも貴重と感じる」と＜近隣・友人との些細な会話や手紙をも得難い交流＞に感じ、「主人の仕事の関係で全国各地の友人とつながれている」と遠方にいる友人とのつながりを感じて＜コロナ禍ゆえに友人とのつながりを想起した安堵感＞をもった。一方で「仲の良い近隣者と会えないことが寂しく気がかりである」と外出制限による＜親密な友人に会えないことへの寂しさ＞も感じていた。

また、サロン参加高齢者は「この地区に感染者がまだ発生していないが、感染者が出たら考えてしまう」と生活圏内での感染を気かけ、＜近隣・友人への感染が気がかり＞になっていた。

【健康を維持する医療従事者との交流】

このカテゴリは、コロナ禍において感染に気遣い、医療受診を懸念する中、普段の生活に寄り添う医療従事者の存在が生活に安堵感をもたらし、サロン参加高齢者の健康な生活を維持する交流であり、＜医療機関に定期受診＞、＜生活に寄り添う医療介入の存在に感謝＞の

2つのサブカテゴリが含まれ、16の記録単位を含み、全記録単位総数の3.4%に該当した。

サロン参加高齢者は、「定期受診には受診している」とコロナ禍においても「医療機関に定期受診」をし、「初診後、主人に訪問診療で医師が来てくれるようになり助かった」と医療従事者による訪問診療が受けられることに安心し、「生活に寄り添う医療介入の存在に感謝」していた。

【日常生活のライフラインを支える職業人との交流】

このカテゴリは、コロナ禍においてもサロン参加高齢者が必要とする支援を担い、普段どおりの生活を支える職業人との交流であり、「普段利用するタクシー運転手による家族サポートに感謝」、「郵便配達員を通じた地域情報入手」の2つのサブカテゴリが含まれ、4つの記録単位を含み、全記録単位総数の1%に該当した。

サロン参加高齢者は、「普段受診時タクシーがないと通院できないので助かる」と通院にタクシーを利用し、「認知症の主人が迷子時、普段利用のタクシー運転手に助けてもらった」と「普段利用するタクシー運転手による家族サポートに感謝」していた。また、サロン参加高齢者は「気になっていた美容院がやっているか郵便屋さんにも状況を尋ねた」と地域をよく知る「郵便配達員を通じた地域情報入手」を行っていた。

V. 考 察

積極的に地域活動をしているサロン参加高齢者は、コロナ禍での社会的ネットワークにおいて【普段どおりの近隣・友人との日常生活交流】、【活動仲間との再会を願う相互交流】、【家族との日常生活の営み】、【家族の感染を気遣う交流】、【外出制限下で創出された時間を活用した家族関係の深化交流】、【コロナ禍を機に見つめ直し心通わす家族の進化交流】、【コロナ禍ゆえに近隣・友人を気遣う相互交流】、【健康を維持する医療従事者との交流】、【日常生活のライフラインを支える職業人との交流】の9つの交流をしていた。

以下、コロナ禍でのサロン参加高齢者の社会的ネットワークにおける交流と、有事の環境下での高齢者のフレイル予防のあり方について考察する。

1. コロナ禍でのサロン参加高齢者の社会的ネットワークにおける交流

コロナ禍においてサロン参加高齢者は、家族を対象に【家族の日常生活の営み】、【家族の感染を気遣う交流】、【外出制限下で創出された時間を活用した家族関係の深化交流】、【コロナ禍を機に見つめ直し心通わす家族の進化交流】し、別居家族とも10名中7名が対面または電話で週1回以上の交流（表2）をしている。

日本の高齢者の社会関係は、家族を中心に構成され、高齢者にとって家族が重要なサポート源泉である（古谷野，2008）。また、高齢夫婦のみの世帯においては、91.7%の高齢男性は

配偶者を重要なサポート源とし、高齢女性は親族、近隣関係、友人関係に組織し、親族を圧倒的に重要なサポート源としている（野辺，1999）。

本研究においてもサロン参加高齢者は、コロナ禍においても【家族と日常生活の営み】を継続し、コロナ禍の環境にあわせて子どもや孫・親族を含む同居・別居家族の相互で【コロナ禍を機に見つめ直し心通わす家族の進化交流】を試み、【家族の感染を気遣う交流】をしている。

同居する夫とは、不要不急の外出自粛により地区活動等で積極的に取り組んできた時間が同居する夫と過ごす時間が増え、夫婦の些細なやり取りに疲労し、夫の健康問題と向き合わざるを得ない時間に変化している。夫の健康問題の先行きに不安をもち、葛藤する生活を送ったことにより、サロン参加高齢者は自身の成長を実感でき自己効力感が高まり、夫婦でこれからの人生を考えるようになっていく。サロン参加高齢者は【外出制限下で創出された時間を活用して家族関係の深化交流】を図っている。

つまり、サロン参加高齢者は有事の環境に合わせて家族成員が相互に良好な関係を創り、平時からの家族との交流を継続させ、自分らしい生活を安心して送っていることから、家族は重要なサポート源であり、平時から継続されている家族の手段的、情緒的なサポート関係が有事の社会的ネットワークにおける交流の基盤であると言える。

また、サロン参加高齢者はコロナ禍において、家族以外の近隣・友人とは【普段どおりの近隣・友人との日常生活交流】を行う一方で、これまでの良好な関係から【コロナ禍ゆえに近隣・友人を気遣う相互交流】もしている。

これは、サロン参加高齢者がコロナ禍においても家族以外の近隣・友人、活動仲間との平時からの交流を継続させ、コロナ禍ゆえにこれまで以上に助け合いの意識を高く持ち、互いを気遣うなどの情緒的にサポートし合う交流である。近所との挨拶、自治会への参加に加えて、情緒的サポートを提供できる近隣者がいる人ことで非常時の助け合いの意識が高くなり、女性においては居住年数の長い人で助け合い意識が高くなる（澤岡ら，2015）と言われていることから、本研究の対象者には女性が多く、かつ20年以上の居住により、有事の環境下においても助け合いの意識を高く持ち普段どおりの生活を営むことができていたと言える。

そして、同じ目的目標をもつ活動仲間とは、活動再開を気にかけて、再開に高揚するなど感情を共有し、【活動仲間との再会を願う相互交流】をしており、自粛生活を強いられる日常に希望と潤いを与え合っていることが考えられる。

さらに、心身の衰えと既往疾患を抱えた生活を送っているサロン参加高齢者は、コロナ禍で遠距離への医療の受診や些細な症状での受診を控えていたが、【健康を維持する医療従事者との交流】は図られており、身近に存在する医療従事者との交流は安心した地域での生活には欠かせない交流となっていると言える。病院への交通手段を担うタクシー運転手の存在や郵便配達員などの【日常生活のライフラインを支える職業人との交流】は、サービス利用で繋がる弱い結び付きの交流ではあるが、サロン参加高齢者が日々交わされる何気ない職種と

の交流がサロン参加高齢者の生活にとって必要不可欠な重要な支えであることが分かる。

以上のことから、積極的に地域活動に取り組んでいるサロン参加高齢者は、社会的つながりをもった暮らしを日常としているため、コロナ禍という有事の環境下になっても、家族、近隣・友人、趣味活動を通じた仲間、ライフラインを支える職業人と良好な社会的つながりを維持・進展させて前向きに暮らそうとする交流をしていると言える。

2. 有事の環境下での高齢者のフレイル予防のあり方について

高齢者は個人的要因や社会的要因により生活全般にわたり、自らの主張を控え、他者に意思決定をゆだねるパワーレスネスに陥りやすく（北川，2015）、日常生活における身体活動、文化活動、地区活動とフレイルが関連する（吉澤ら，2019）。また高齢者の社会的参加や社会との交流は、長生きや身体的自立を保ち、主観的 QOL を高めることとも強く関連している（厚生労働省，2009）。

これらから、コロナ禍で積極的に他者と交流ができない高齢者はパワーレスネスの悪循環に陥り、フレイルになりやすく、主観的 QOL の低下が危惧される。特に積極的に社会的交流を図ってきたサロン参加高齢者にとっては、日常の活動性が高いゆえに外出自粛、地区活動休止による他者との交流縮小の影響を受けやすく、身体的活動の低下、社会的孤立が加速し、フレイルに陥ることが推察される。

しかし、サロン参加高齢者は、＜外出制限下で夫の健康問題と対峙＞し、＜外出制限下の時間で夫の健康問題に直視して先行きに不安＞と潜在化されていた家族の健康問題がコロナ禍での生活時間で夫との交流をとおして問題を意識し、＜外出制限下での夫の健康問題・行動に対する自身の覚悟＞と自らの問題を自覚したことで、＜夫の健康問題の葛藤から自己成長を実感＞し、＜コロナ禍で今後の夫婦生活を志向＞へと展開する他者との相互作用によるプロセスを経ていた。また、別居する家族とも＜家族とコロナ禍を機に新たな相互連絡の試み＞をコロナ禍という環境に合わせた心通わす新しい生活様式を獲得する試みを図っていた。

また、コミュニティにおいても「近隣に住む独居の方の愚痴を聞いてあげる」、「毎日の畑仕事で隣の畑にいる友人と、楽しく話ができるから、大きく変わったことはない」と平時と変わらない相互交流をコミュニティで継続していた。

コロナ禍においてサロン参加高齢者は、自らが周囲や地域社会と関係を持ち、問題意識を共有しながら主体的に意思決定し自らの生活をコントロールできるプロセス（佐藤ら，2018）であるエンパワメントを自らが実現していた。つまり、サロン活動に参加するような活動的な高齢者は、コロナ禍の有事の環境下においても自らでエンパワメントを図ることができると言える。

また、エンパワメントは他者との相互作用によって生じるプロセスであり、交流の中で自分が認められたり、受け止められたり、他者を支える経験をするるとエンパワメントは高まる。個人のエンパワメントが高まり他の問題に対して対処できる普遍的問題解決能力が獲得できる

と地域全体の問題を捉え、コミュニティパワメントに発展する（麻原，2000）としている。

本研究においてもサロン参加高齢者は、コロナ禍の有事の環境下で家族、近隣・友人、活動仲間との相互の交流を通じて課題を認識し、主体的に自分らしい新たな価値観での生活に再構築させる個人のエンパワメントを発揮し、個人のエンパワメントの高まりから、コロナ禍によって交流が縮小する社会状況をコミュニティ全体の問題として捉え、コミュニティエンパワメントに発展したと考えられる。

よって、有事の環境下で高齢者がパワーlessnessの悪循環に陥ってフレイルにならないためには、平時から社会的つながりを維持する生活が重要であり、高齢者自らがエンパワメントを高められるように支援することが必要である。エンパワーの過程を支援する看護職者のあり方として、①協働関係であること、②対象となる人々の理解、③対象者のエンパワーのプロセスを支える（麻原，2000）としていることから、高齢者を支える支援者は、有事の環境でフレイルに陥らず、自らエンパワメントを図れるように、平時から高齢者と相互に協働し、理解し合う関係を築き、高齢者が他者と相互に感情の交流が図れる時間と場を創出し、かつ継続できる環境をともに整え、支え続けることが重要である。

VI. 研究の限界と課題

本研究の限界は、結果の飽和化に必要な人数15名前後である（舟島，2010）ため、本研究が10名と若干対象者が少なく、かつ性別の偏りがあるため必ずしも一般化されたとは言えないことである。今回の結果を参考に、性別を均等にし、対象者数を増やして、結果の精度を高める必要がある。

今後の研究の課題は、社会的つながりが希薄になりやすいとされている男性や平時に地区活動に参加していない高齢者を対象にした社会的ネットワークにおける交流の分析をはかり、個別にそった社会的孤立を防ぎ、高齢者自らの力を引き出す支援の在り方を明らかにすることである。

VII. 結 語

コロナ禍でのサロン参加高齢者の社会的ネットワークにおける交流は、【普段どおりの近隣・友人との日常生活交流】、【活動仲間との再会を願う相互交流】、【家族との日常生活の営み】、【家族の感染を気遣う交流】、【外出制限下で創出された時間を活用した家族関係の深化交流】、【コロナ禍を機に見つめ直し心通わす家族の進化交流】、【コロナ禍ゆえに近隣・友人を気遣う相互交流】、【健康を維持する医療従事者との交流】、【日常生活のライフラインを支える職業人との交流】の9カテゴリが抽出された。

サロン参加高齢者は、平時から社会的つながりをもった暮らしを日常としているため、コ

コロナ禍という有事下の環境においても、他者と良好な社会的つながりを維持・進展させて前向きに暮らそうとする交流をしており、有事の環境下でのフレイル予防には、高齢者自らが平時から社会的つながりをもってエンパワメントを図れる支援が必要である。

謝 辞

本研究を行うにあたり、インタビューにご協力賜りました A 市 A 地区の A 高齢者サロンの参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

【文献】

- 麻原きよみ. (2000). 高齢者のエンパワーメント —文化的見地からのアプローチ—. 老年看護学, 5(1), 20-25.
- Berelson, B. (1957). 稲葉三千男, 金圭煥 (訳). 内容分析. 東京: みすず書房.
- 舟島なをみ. (2010). 看護教育学研究 —発見・創造・証明の過程, 第2版. 東京: 医学書院.
- 舟島なをみ. (2016). 質的研究への挑戦, 第2版. 40-80, 東京: 医学書院.
- 原田謙. (2017). 社会的ネットワークと幸福感—軽量社会学でみる人間関係—. 17-26, 東京: 勁草書房.
- 長谷川浩 (編). (2011). 系統看護学講座 基礎分野 人間関係論. 26-33, 東京: 医学書院.
- 独立行政法人国立長寿医療研究センター (2014). 食 (栄養) および口腔機能に着目した加齢症候群の概念の確立と介護予防 (虚弱化予防) から要介護状態に至る口腔支援等の包括的対策の構築および検証を目的とした調査研究 (事業実施報告), 6-16. rojihokoku1_25.pdf (ncgg.go.jp)
- 北川公子 (著). (2015). 系統看護学講座 専門分野II 老年看護学. 75-76, 東京: 医学書院.
- 厚生労働省「閉じこもり予防・支援マニュアル」分担研究班. (2009). 閉じこもり予防・支援マニュアル (改訂版), 15.
<https://www.mhlw.go.jp/topics/2009/05/dl/tp0501-1g.pdf> (2020.6.21 アクセス)
- 厚生労働省. (2020). 高齢者の医療の確保に関する法律に基づく高齢者保健事業の実施等に関する指針.
<https://www.mhlw.go.jp/content/000616242.pdf> (2020.10.21 アクセス)
- 厚生労働省. (2020). 新型コロナウイルス感染症への対応について: 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に配慮して通いの場等の取組を実施するための留意事項について.
<https://www.mhlw.go.jp/content/000636894.pdf> (2020.8.23 アクセス)
- 古谷野亘. (2008). 高齢期の社会関係: 日本の高齢者について最近の研究. 聖学院大学論叢, 21(3), 191-200.
- 松本弘美, 藤井麻帆, 福永まゆみ. (2020). 高齢者の社会参加の要因となる交流に関する文献レビュー. 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要, 81, 21-30.
- 内閣官房新型コロナウイルス感染症対策推進室. (2020). 新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言
https://corona.go.jp/news/pdf/kinkyujitai_sengen_0407.pdf (2020.6.21 アクセス)

- 野辺政雄. (1999). 高齢者の社会的ネットワークとソーシャルサポートの性別による違いについて. 社会学評論, 50(3), 375-392.
- 佐藤紀子, 雨宮有子, 細谷紀子, 飯野理恵, 丸谷美紀, 井出成美. (2018). 高齢者にエンパワメントに着目した介護予防支援ガイドの作成. 千葉看会誌, 24(1), 1-11.
- 澤岡詩野, 渡邊大輔, 中島民恵子, 大上真一. (2015). 都市高齢者の近隣との関わり方と支え合いへの意識 -非常時と日常における近隣への意識に着目して-. 老年社会科学, 37(3), 306-315.
- 社会保障実務研究所. (2020). 一体的実施の対応で自治体の好事例を紹介, 第2回生活を守るプロジェクトチーム. 週刊保健衛生ニュース, 2060, 34-36.
- 吉澤裕世, 田中友規, 高橋競, 藤崎万裕, 飯島勝矢. (2019). 地域在住高齢者における身体・文化・地域活動の重複実施とフレイルとの関係. 日本公衆誌, 66(6), 306-316.